

冬の旅

Winterreise Op. 89, D 911

作曲 フランツ・シューベルト Franz Schubert
原詩 ヴィルヘルム・ミュラー Wilhelm Müller

第1部 Erste Abteilung

1. おやすみ Gute Nacht

よそ者としてやってきて
よそ者として去って行く
五月の街はたくさん花束と共に
ぼくを好意的に迎え入れてくれた
あの娘は愛を語り
母親は結婚のことまで口にした
ところが今 世界は真っ暗で
道は雪に覆われている

ぼくは旅立ちのときを
選ぶ事など出来はしない
この暗闇の中で
自ら道を探さなければならない
月明かりに映る
ぼくの影を連れて
雪に覆われた広野の中
けもの道を辿って行く

何故にこれ以上ここに留まる事が出来ようか
みんながぼくを追い立てるというのに
狂った犬どもは 飼い主の家の前で
勝手に吠えていればいい
愛する気持ちが変わりやすいのは
神様が定めた事

ひとりを愛したかと思ったら また別の誰かを愛している
愛しい人よ おやすみ！

きみの見る夢を壊したくないし
きみの眠りを邪魔したくない
ぼくの足音が聞こえないように
そっと扉を閉めよう
出かける時にきみに向けて
門の上に「おやすみ」と書いておこう
きみを思って去って行く事を
分かってくれるように

2. 風見鶏 Die Wetterfahne

美しいあの娘の家の屋根の上で
風が風見鶏と戯れていた
妄想にとらわれていたぼくは思う
惨めな逃亡者を口笛で追い払うのかと

もっと早く気が付くべきだったんだ
家の上に掲げられたそのしるしに
そうすれば決して求めはしなかつただろう
この家の中に理想的な女性の姿を

風はその家の人々の心にも戯れる
屋根の上と同じ様に ただ音もなく
誰がぼくの苦しみを分り得るといふのか？
自分の娘を裕福な家に嫁がせることにしか興味のない人間達に

3. 凍った涙 Gefrorene Tränen

凍った雫が
ぼくの頬から落ちてゆく
ぼくは気が付かないうちに
泣いていたのだろうか？

ああ、涙よ、 ぼくの涙よ

何故にそんなに生ぬるいのか
冷たい朝の露のように
凍ってしまうなんて

燃える様な熱さで
胸の泉から沸き上がれ
そして冬の氷をすべて
溶か尽くしてしまうほどに

4. 氷結 Erstarrung

雪の中で空しいと知りながら
彼女の足跡を探してしまう
かつて彼女が僕の腕にすがり
一緒に歩いた緑の野原を

この大地に口づけして
氷と雪を
ぼくの熱い涙で溶かしてやろう
土の地面が見えてくるように

花はどこにいったのか
緑の草はどこにある
花々は死に絶え
草は枯れ果て色褪せてしまった

ここからは思い出の品も
何も持ち出すことが出来ないのか？
ぼくのこの苦しみが消え失せてしまえば
だれが彼女のことを語ってくれるのか？

僕の心は死んでしまったも同然
彼女の面影が凍りついたまま：
この凍った心がいつか再び溶けるなら
彼女の面影も流れ去ってしまうだろう

5. 菩提樹 Der Lindenbaum

市門の外の泉の傍に
一本の菩提樹が立っている
その木陰でぼくは何度も
甘い夢を見たものだ

ぼくはたくさんの愛の言葉を
その幹に彫りつけた
嬉しい時も悲しい時もいつも
その木に足が向かってしまった

今日も真夜中に
その木の前を通らなければならなかった
真っ暗闇だったけれど
思わずぼくは目を閉じた

すると枝々がざわめきたて
まるでぼくの事を呼んでいる様に思われた：
「さあおいで、若者よ
お前の憩いはここにあるんだよ」と。

冷たい風が正面から
ぼくの顔に吹き付けた
帽子を飛ばされても
僕は振り向くことをしなかった

今ぼくはあの場所から
ずいぶん離れた場所に来た
しかしあのざわめきが今もぼくに呼びかける
「お前の憩いはここにある！」と

6. 溢れる涙 Wasserflut

ぼくの眼からたくさんの涙が
雪の中に落ちてゆく
冷たい雪片はまるで喉が渇いているかの様に

熱い苦しみをすべて飲み込んでしまう！

草が芽吹く頃には
暖かい風が吹きつけて
氷は粉々に砕け散り
やわらかい雪も解けて流れよう

雪よ、お前は僕の想いを知っているはずだ
言ってごらん、どこへ流れて行くのか
ただ僕の涙について行けば
すぐに小川が迎え入れてくれるだろう

小川と一緒に町の中を通り抜けて
賑やかな通りを次々に流れ過ぎ
僕の涙が熱く燃えるのを感じたら
そこが僕が愛したあの娘の家なんだ

7. 川の上で Auf dem Flusse

あんなに陽気に流れていた
明るく澄んだ激しい流れよ
こんなに黙りこくって
別れの挨拶もしてくれないなんて！

固い氷でしっかりと
自分を覆い尽くしたお前は
冷たく動くことなく
砂の上に横たわっている

お前の覆いの上に
尖った石で
愛する人の名前と
日付を刻み付けよう

僕たちが初めて挨拶を交わした日
僕が町を出て行く日

名前と日付の回りには
壊れた指輪が縁取るように

ぼくの心よ、この小川に
自分の姿を見るだろう
お前の殻の下でもまた
激しさが吹き出そうとしている様を

8. かえりみ Rückblick

氷と雪の上を歩いているのに
足の裏は燃えるようだ
町の塔が見えなくなるまで
決して息をしたくない

石につまずきながら
ぼくは急いで町を出た
カラスが家々の屋根の上から
ぼくの帽子に雪と氷を落としていった

ぼくを迎え入れてくれた時はずっと違っていたはず
移り気な町よ
町中で輝く家々の窓辺では
雲雀とナイチンゲールが歌い競っていた

菩提樹には花が咲き誇り
清い流れは明るくせせらぎ
そして、ああ、あの娘の瞳が輝いていた！
そこでお前は破滅したのだ、若者よ！

あの日のことを思い出すと
もう一度振り返りたくなる
彼女の家の前によるめきながら戻り
静かに彼女の家の前に立ってみたくなる

9. 鬼火 Irrlicht

奥深い岩場の底へ

鬼火に誘い込まれてやってきた
どうやって出口を探すかなんて
ぼくにとってはどうでも良いこと

迷ってしまうのにはもう慣れた
どんな道でもどこかには通じている
ぼくたちの喜びも苦しみも
鬼火の戯れに過ぎないのだ

水の枯れた溪流に沿って
ゆっくりと下ってゆこう
どんな川でもやがて海に達するように
どんな苦しみもいずれは墓に入るだろう

10. 休息 Rast

休むために身を横たえて初めて
自分がどんなに疲れているのか気が付いた
さすらいの心だけがぼくを支えていた
荒々しい旅路において

足は休息を求めなかったし
立ち止まるには寒すぎた
背中の荷物の重みを感じなかったのは
嵐が後ろから歩みを助けてくれたから

ある小さな炭焼き小屋で
休む場所をぼくは見つけた
しかし手足は決して休もうとしない
傷がこんなにも燃えているから

ぼくの心よ、戦いや嵐の中でお前は
あんなにも勇猛で勇敢だったのに
静けさの中に来てようやく

心に潜む虫が刺す痛みを感じているのか！

11. 春の夢 Frühlingstraum

色とりどりの花の夢を見た
五月に咲く鮮やかな花々
緑の野原を夢に見た
朗らかな小鳥のさえずりを

しかし雄鶏が鳴いて
ふと目が覚めた
そこは冷たく真っ暗で
屋根からはカラスの鳴き声が出た

あの窓硝子に
木の葉を描いたのは誰だろう？
冬に咲く花を夢見る者を
嘲笑しているのか？

ぼくは恋の夢を見た
美しい娘の夢を見た
愛し合い、口づけして
喜びと至福を感じていた

しかし雄鶏が鳴いて
ぼくの心は夢から覚めた
今は独りでずっと座って
その夢を思い出している

そして再び目を閉じると
心はまだ熱く高鳴っている
窓辺の葉はいつ緑に色づくのか？
いつぼくは愛しい人をこの腕に抱きしめることができるのか？

12. 孤独 Einsamkeit

モミの木の梢を

そよ風が吹き過ぎる時
晴れた空に
陰鬱な雲が流れゆくように

ぼくは重い足取りで
自らの道を歩みゆく
活気のある町の中を
孤独に、挨拶も交わさずにただただ進む

ああ、なんと空は穏やかなことか！
ああ、なんと世界は明るいことか！
嵐が吹き荒れていた時は
ぼくはこんなにまで惨めではなかった

第2部 Zweite Abteilung

13. 郵便馬車 Die Post

通りの方から郵便馬車のラッパの音が鳴り響く
どうしてこんなに高鳴るのか
ぼくの心よ！

郵便馬車はお前に手紙を運んでくるはずはない
それなのにどうして妙に胸が高鳴るのか
ぼくの心よ！

そうだ、郵便馬車はあの町から来たのだ
ぼくの愛しいあの娘の住む町から
ぼくの心よ！

首を伸ばして見てみたいのだろう
そして尋ねてみたいのだろう、あの町はどんな様子かと
ぼくの心よ！

14. 白い頭 Der greise Kopf

霜がぼくの髪に降りて
頭を真っ白にしてしまった
これで老人になれたんだと
僕はとても喜んだ

しかし霜はすぐに溶けて
もとの黒髪に戻ってしまった
自分のこの若さが恐ろしい
墓に入れるまではなんと遠いことか！

夕焼けから朝焼けの間に
白髪になる人がたくさんいると言う
しかし誰がそんな事を信じることができよう
僕の髪は、この苦しい長旅の間、全く変わらないというのに！

15. カラス Die Krähe

一羽のカラスがぼくと一緒に
あの町からやってきた
今までずっと離れる事なく
頭の上を舞っていた

カラスよ、お前は不思議な生き物だな
僕から離れて行く気はないのか
もうすぐ倒れるぼくの体を
さては餌食にするつもりだな

さすらいの杖にすがりながら歩けるのも
もうそんなに長くはない
カラスよ、最期まで示してくれ
ぼくが墓に入るまで 忠実なお前の姿を

16. 最後の希望 Letzte Hoffnung

あちこちに生い茂る樹の枝に
色付いた葉っぱが見える

僕は樹々の前に佇んで
物思いに耽っている

ぼくはその中の一枚の葉っぱをじっと見つめて
ぼくの希望を託す
風がぼくの葉っぱに戯れると
思わずぼくの心も震えてしまう

ああ、いよいよその葉っぱが地面に落ちて
ぼくの希望も消え失せてしまった
ぼくも地面に崩れ落ち
ぼくの希望が舞い落ちたその墓に涙を流す

17. 村で Im Dorfe

犬たちが吠えて、鎖がガチャガチャと鳴る
人々は各々のベッドで眠り
まだ手にしていないものを夢見て
一喜一憂している
そして朝になるとその夢は全て消え去ってしまう
それも良からう、自分の身分を弁えて楽しんでいるのだし
そして手に入っていない夢を
再び枕の上で見られるようにと願う

吠えて僕を追っ払うがいい、目覚めている犬たちよ
このまどろみの時間に ぼくに安らぎを与えないでくれ
ぼくの夢はすべて破れてしまった
それなのにどうして夢見る者たちの場所に留まっていられようか

18. 嵐の朝 Der stürmische Morgen

嵐は激しく引き裂いてゆく
空を覆う灰色の雲を
千切れた雲があちこちに飛び交う
戦いに疲れた様相を見せて

そして赤い炎が

雲の合間に燃え上がる
これこそがぼくの心境にぴったり合った
朝であると言えるだろう

ぼくの心は空に描かれた
自分の姿を目にしている
それはまさに冬そのもの
冷たく荒々しい冬そのもの

19. まぼろし Täuschung

一筋の光がぼくの前を樂しげに舞ってゆく
ぼくはその光をふらふらと追ってゆく
ぼくには分かっているけれど 喜んで付いて行く
それが旅人を惑わす光だということを
ああ ぼくのように惨めな者だけが
こんな色鮮やかなまやかさに惑わされるのだ
それは氷と夜と恐怖を超えて
明るく暖かい家を描き出す
そしてその中には愛しい人の思いが宿り
ぼくに与えられたのは そんな幻だけ

20. 道しるべ Der Wegweiser

他の旅人が通る道を
なぜにぼくは避けるのか
雪の降り積もる岩山に
隠れた小径を探すのか？

人目を避けなければならないような
悪い事をしたわけではないのに
なんという狂った欲求が
ぼくを荒れた地に駆り立てるのか？

通りには道しるべが
町までの行き方を示している
だが僕は限界を超えて歩き続ける

休む事なく 安らぎを求めて

ひとつの道しるべの前に来て
ぼくはじっと立ち尽くす
未だかつて誰も戻って来なかった道を
ぼくは歩み続けよう

21. 宿屋 Das Wirtshaus

ぼくの歩んだ道は
とある墓地へと行き着いた
ここを宿にして休息したいと
ぼくはひとり考えた

墓にかかる緑の葉で編まれた弔いのリースよ
お前達は疲れ果てた旅人を
冷たい宿屋へと誘う
目印なのかもしれない

この宿屋には
空き部屋はひとつもないというのか？
僕は疲れ果てて倒れる寸前
酷い傷を負っているというのに

ああ 無慈悲な宿屋の主人よ
それでもぼくを受け入れないのか
それならば仕方がない さらに進もう
ぼくの忠実な旅の杖よ！

22. 勇気を！ Mut

雪が顔に降りつけるなら
それを払い落とせばいい
心な中で愚痴が聞こえてくるならば
明るく元気に歌ってやる

心が言うことなんかに

耳を傾けない
心の嘆きなど感じはしない
嘆くなんて愚か者のすることさ

楽しげに世界へ飛び出して行け
風と嵐に逆らって
この世に神がないというなら
自らが神になってやれ！

23. 幻日 Die Nebensonnen

太陽が三つ空に出ているのを
ぼくは長いことじっと見つめていた
太陽もそこでじっと佇んでいた
まるで僕から離れたくないみたいに
ああ お前たちはぼくの太陽ではない！
他の人の顔を覗き込めば良い！
確かに僕もこの間まで三つの太陽を持っていたけど
良い方の二つは既に沈んでしまった
残りのひとつも沈んでしまえばよいさ
暗闇こそがぼくの居るべき場所なのだから

24. ライアー回し Der Leiermann

向こうの村はずれに
ライアー回しが立っている
かじかんだ指で
彼に出来る曲だけを回している

裸足で氷の上を
よろめきながら歩いて行く
施しを願う皿の中は
いつまでも空っぽのまま

誰も彼の演奏を聞こうとしないし
誰も彼を見ようとしない
犬たちだけが

その老人を囲んで唸っている

彼はすべてを

なすがままに任せて

ただただライアーを回す

彼の音楽は決して鳴り止むことがない

不思議な老人よ

あなたと歩みを共にするべきだろうか？

僕の歌に合わせて

ライアーを回してくれるのかい？